

北山茂夫

萬葉集とその世紀中



北山茂夫

萬葉集とその世紀

中

新潮社版

萬葉集とその世紀(中) 定価一五〇〇円

昭和五十九年十二月二十日 発行
昭和六十年八月五日 六刷

著 者 北 山 茂 夫
発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 東京都新宿区矢来町七十一番地
株式会社 新潮社

電話 東京(總)五一一一(營業)
東京(總)五四一一(編集)
振替 東京四一八〇八 千一六二

印刷 二光印刷株式会社
製本 大口製本株式会社

凡丁、落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-355402-9 C0021

© Moto Kitayama, Printed in Japan, 1984.

萬葉集とその世紀（中） 目次

序章	天平への道において	7
第一章	過渡期の政治的潮流	15
第二章	歌の世界はひろがる	65
第三章	宮廷歌人、金村と赤人	85

第四章	民間伝説歌の高橋虫麻呂	151
-----	-------------	-----

第五章	風雅の大官大伴旅人	191
-----	-----------	-----

第六章	貧窮問答の歌と山上憶良	251
-----	-------------	-----

第七章	広大な裾野の光景	305
-----	----------	-----

第八章	遣新羅使の歌群	363
-----	---------	-----

萬葉集とその世紀（中）

序章 天平への道において

聖武朝の発進

中巻は、柿本人麻呂の死後、『萬葉集』が、天平時代へと歩みをつづける過渡の時代、別の言葉でいえば、中期の、作者たちと大量の歌群を順次に見てゆくことにしよう。まず、この時期の一面を象徴する、宮廷史的事件を冒頭に紹介したい。

『萬葉集』巻六の雑歌の部に、

六年甲戌、海犬養宿禰岡麻呂の、詔に応ふる歌一首

御民われ生ける駿あり天地の栄ゆる時に相へらく念へば 九九六

が収められている。詞書の六年とは、天平六年、すなわち七三四年である。時の天皇は聖武で、官人貴族である岡麻呂は、天皇の詔にこたえて、この歌をつくり捧呈したのである。かれは、天皇に対

してわれを「御民」と呼んでいる。正しくは、「臣」という身分であるが、このときの、作者の気分としては、臣をも含めた被治者の意味で、ひろく讃仰の精神を示したかったのであろう。聖武の治世を「天地の榮ゆる時」とたたえ、その盛世にめぐりあつたことに、「御民」としての生き甲斐を感じていると歌った。詔に応じた作としてふさわしい内容をもっている。儀礼歌の一首とみてよい。

いつこの歌が作られたか。『萬葉集』はその点についてふれていない。それにつづいてすぐあとに、春三月の歌が六首掲げられている。してみれば、岡麻呂の歌は、一月から三月にいたるまでの間に作られたことになる。正月の宮中の賀宴で披露されたと考えることもできよう。しかし、わたくしは、そうではなく、次に示す宮廷での盛大な催しの場において、詔にこたえて作られたのではないかと想像している。

七三四年一月に、藤原不比等の長子武智麻呂は右大臣となり、台閣（太政官執政部）の首班としての地位をかためた。その二月一日に、右大臣の發議かどうかはわからぬが、朱雀門の前で歌垣（男女が集まり、歌をよみ交し舞って遊ぶこと）を催し、天皇はそこに姿を現わした。歌垣に参加したものは男女二四〇人あまり、五位以上の「風流」ある者は皆これに加わつた。長田王、栗栖王、門部王、野中王らを頭とし（リーダーとして）歌の本末（上の句と下の句）を以って唱和させた。難波の曲、倭部の曲、浅茅原の曲、広瀬の曲、八装刺すの曲が歌われたという。これらは、宮廷の雅楽寮において保有されていた歌曲にちがいない。政府は、都下の士女（身分のある者）に歌垣を観覧させた。そのあと、聖武は、歌垣に奉仕した男女らに禄をあたえた。

この史実は、『続日本紀』に、記されているのであるが、たしかに、宮廷のめざましい盛儀といえよう。天皇とその政府は、この歌垣の行事をもつて、世上が平穩であることを宮廷の内外に誇示したのであろう。しかし、それは、都民のあいだからもあがつた催しではない。主催は、宮廷、政府で

ある。

その席上で、聖武は、側近の諸臣に歌の提出を命じたのではなからうか。そして、岡麻呂の天皇讃歌だけがのこり、『萬葉集』に採択されたのであろう。この一首をおおう精神は、前期末の人麻呂と共通する点も否定できないが、いつそうイデオロギー性を強く帯びているところに、時代の特質がある。それというのも、この一首は、同時代の山上憶良の「貧窮問答の歌」に接近して作られているからである。その対比は、後章で明らかになるであらう。

それにしても、一官人が、その生きた時代を「天地の栄ゆる時」と讃えたのには、それなりの根拠があったはずである。それもまた本巻で、もろもろの貴族の歌を通して解明しなければならない。それに少しふれると、岡麻呂ひとりではなく、数年前に、北九州の大宰府にあって、大宰少貳の小野老が、

青丹あそによし寧楽ならの京師みやこは咲く花の薰にほふがごとく今盛さかりなり 三二八

と歌っていた（巻三）。これには、貴族としての望郷の気分が底に流れているとおもわれるが、やはり、奈良の都の栄えをたたえたことには変りはない。

二人の官人が歌に託して感慨をもらした対象は、聖武朝の天平文化の開花にほかならない。それに、かれらは、誇りを感じていた。

対立も矛盾も

次に、朱雀門の歌垣とは対照的な、歴史の場面をみておこう。これも、『続日本紀』の記事の一つにある。七三〇年（天平二）九月二十九日の天皇の詔のなかに、

又京に近き左側の山の原に、多人を聚集して妖言まじして衆を惑まどはす。多きときは則ち万人、少きとき

は乃ち^{すなは}数千。……

とある。平城京に近い左側の山の原とは、のちにそこに東大寺が建てられる春日野にちがいない。そこで、秋のとり入れが終った季節に、連日、人民の集会がひらかれ、たいへんな人出がつづいていった。「妖言して衆を惑す」というのだから、誰かが、この大集会の中心に立つて民衆に語りかけていたのである。これもじつは、天平文化の力強い一面といわねばならない。あきらかに、同一の文化のなかに、対立もあれば矛盾も深まっていた。それは、歌詠や詩賦の文芸的現象にひろく反映しているはずである。それをこの巻では、できるだけ詳細に究明してみたいとおもう。

そして、この点こそが、上巻の様相とは大いに異なる歴史と歌の姿である。

萬葉の中期とは

いま冒頭でのべた歴史の場面は、中期の終りに近い。この中期のはじまりを、わたくしは、人麻呂が歿したと考えられる文武天皇の慶雲期（七〇四〜七〇七）にとる。

そして、その終末を七三七年（天平九）に求める。この年に大疫が都と地方に荒れ狂い、藤原不比等の四子で政權を握っていた武智麻呂らが罹病して次々と歿し、官人、百姓の死する者が厖大な数にのぼった。これを機に、皇親の橘諸兄の政權が成立した。大疫が一大政変をもたらしたのである。それ以前に、中期を代表する大伴旅人^{たぐと}は七三一年（天平三）七月に他界し、つづいて山上憶良が生涯を終えた。それは七三三年（天平五）ころであった。人麻呂の流れを汲むこの時期の宮廷歌人の一人、山部赤人も七三六年（天平八）の儀礼歌をもって『萬葉集』から姿を消してしまった。わたくしは、赤人もまた大疫の犠牲になったものと考えている。以上の二つの理由から、萬葉の中期は、いちおう七三七年をもって、その歌の歴史を閉じると考えたい。

前期にくらべると、たいへん短かい。しかし、著名な作者も多く、それ相当の豊かさを歴史と作歌が示している。

わが律令的古代国家は、文武天皇の大宝年間（七〇一―七〇三）に、発展の頂点に達した。それを有力に証明するものは、大宝律令の制定ならびに即時実施と、げんに正倉院に遺存している七〇二年（大宝二）の戸籍残簡の充実した内容であろう。ほかに、久しく杜絶した唐帝国との通交の再開も国力の充実してきた現われと解してよいであろう。

古代国家、下降へ

しかし、その盛時の直後の慶雲期には、早くも国家の基盤に生じたもろもろの矛盾が表面化してきた。それは、文武・持統の古代権力の黄金時代にはまだ見られなかった事態である。それについては次の章で具体的にのべることにしたい。

巨視的にとらえれば、古代国家はごくゆるやかな下降のカーブを辿りはじめるのである。そこでは、貴族の層のなかに、後ほど記すような、新・旧の対立がようやく明らかな現象となり、政策にも少なからぬ影響をもたらした。

守旧派を代表するのは、元明・元正の女帝、天武の諸皇子と皇親系、大伴らの旧大族であった。それに対して、律令政治に柔軟性をあたえて社会の矛盾に対応しようとしたのは、官僚貴族たち、その代表は、藤原不比等らであった。もっとも、新・旧両派は、地方豪族、農民に対しては、矛盾をはらみつつもほぼ共通の姿勢を保った。だから、この中期には、七二九年（天平一）の長屋王の変以外には、対立の激化を示す内乱・クウデタはなく、比較的平穩の歲月がつづいていた。

国家権力の強圧に抗して、地方の豪族、農民の動きが次第に活潑になってきた。詳しくはのちの叙述にゆずるが、土地問題（墾田地を中心とした）、浮浪、逃亡の続出、さらに、豪族、農民の間に拡大していった行基とその集団の指導による宗教運動が、その著しい現象であった。さきにふれた春日野

の大集会は、その異常なまでの運動のたかまりを朝廷の前に示したものだといえよう。

詩賦と述志・叙景の歌

萬葉中期の有力な作者たちの多くは、官人であつた。この動乱をふくむ形勢のなかで、かれらはどういう歌をのこしたであろうか。とくに、大伴旅人、山上憶良の場合については、社会矛盾との関係で新しく検討しなければならない。山部赤人、笠金村の作歌姿勢はどのようなものであつたであろうか。この二人は、人麻呂の作歌活動とどのような差異を見ていたか。それらを中巻のなかで深く問わねばならないであろう。

かれらの歌詠の流れのほかに、詩賦の問題もある。天智、天武の時代よりも、官人貴族の詩作がさかんになり、聖武朝の七二六年（神亀三）九月には「文人一百十二人」が詩篇を朝廷に捧呈した、と『続日本紀』に記されている。萬葉の作者も詩賦に興味を示した。不比等の子字合、石上麻呂の子乙麻呂には個人詩集さえ編まれている。詩に巧みな官人を当時「文人」と呼んだ。官廷の儀礼の場、また社交では、歌よりも詩がはるかに重んじられた。朝廷が唐風に傾いていたからであろう。したがって、内外の詩の享受は、前期を凌いでおり、歌詠にも強い影響をもたらした。そこに述志の歌が重要性をおびてきた。萬葉において、新紀元を画する歌風をうみ出すにいたつた。その方面の代表的な作者は、中期の大伴旅人と山上憶良であつた。この巻では、この二人の評伝と作歌の究明にもっとも力を注ぐつもりである。

前期の終りにも、旅人の弟、大伴田主は、風流士みやびおとうわさされていた。それが、中期になると、いっそう風流士がふえたし、恋すらもみやびのたわむれの性質を深めるようになった。それは、とくに『萬葉集』巻一〇から巻八の多くの歌から読みとれる。また、貴族たちは、その邸に、花木を植え、啼鳥の声をたのしみ、かなりひろく周辺の自然に美をさぐるようになった。相聞歌とは別に、叙景歌が成立した。赤人や湯原王は、その傾向を代表する作者である。かれらの日常的な美のとらえ方を、

その歌において明らかにする必要がある。そこに、日本人の美意識のそもそもの遠い起源があるとおもわれるからである。述志の歌とこうした内容の叙景歌とが、時には、同一の人間の内部に共存していた。それは、近代以前では、この時期にしか見られない詩的形姿であろう。その点が、探究者としてのわれらにはたいへん興味が深い。

卷三―卷一六が対象

前期の歌を扱った上巻では、おもに『萬葉集』の卷一、卷二から材料をとったが、この中巻では、卷三から卷一六にいたる諸巻から、考察の対象とする数多くの歌をえらび出す。

ただ、卷一一、卷一二、また卷一三、ついで卷一四の歌が作られうたわれたのは、萬葉の前期の終りであろう、とわたくしは推定している。むろん、少数にすぎないが、中期のはじめのものも付加されているだろう。ひっくりるめていえば、それらは、中期に対しては、前期末の文芸的遺産といふべきものである。だから、それらの巻々の歌を上巻の終りで扱ってもよかったのだが、紙幅の関係から中巻にまわすことにした。

ここでいえることは、そうした歌群は、中期のはじめの貴族たちによって編纂され、かれらの作歌の参考の資料とされ、また口誦して享受されたことである。その意味では、それは、中期に生きた宮廷人の文芸的財産の主要なものであった。それゆえに、それらを中巻で扱っても不当ではあるまい。

